

対策文「鳥獸言語」と九世紀の史官たち

——言語に分節する技としての十二律・六十四卦・三十一文字——

三品 泰子

1 境界面上の文字

自然界の無数の事物のうち、ある時、ある特定の物が、何かの意味を秘めたものとして区別され特立される。解説の現場に目を向けると、そこには正解が一つあるわけではなく、多方向に揺れ動いている。

例えば『続日本紀』天平元年六月の亀の祥瑞記事によると、亀甲の表面のデコボコや色むらによる文様を、史官は「天王貴平知百年」という文字列に見立てて「文」と呼び、一方、聖武天皇は宣命の中でその文様を文字としては捉えずに、「凶」と呼ぶ。津田博幸氏は、同じ亀甲の文様が、ある者には文字に見える、またある者にはそれが凶形に見えて、それぞれ異なるタームで指し示すという点に注目し、こうした揺れが生じるのはこの出来事が自然と文化の境界面上で起きているからだ¹⁾と説く。

自然と文化の境界面上とは、言い換えると、言語と非言語の間の中間領域であり、意識と物質の境界面上である。岡部隆志氏の説く、(意識や感覚に)「『さわる』ことを何かに刻み込む

ような作用」としての「文字ざわり」²⁾、また猪股ときわ氏が説く、漢文の敷文構句に馴染んだ安万侶にとって『古事記』で歌を一字一音で書くとき文字が急に見知らぬものとして迫ってきた³⁾ということ。これらはみな、言語と非言語の境界面上に出没する文字現象だといえよう。

このように八世紀では、史官や天皇(聖武天皇・孝謙天皇)が自然界からモノとしてもたらされる文字に直面し、また『古事記』や『万葉集』でも、書き手が歌を書くとき文字が意味以前のモノとして書き手に迫っていた⁴⁾。そして今度は十世紀初頭、醍醐天皇の代の延喜八年(西暦九〇八年)に、鳥獸の鳴き声が人間にとって言語音として聞きとれるかどうかという、音をめぐる言語と非言語の境界を論じる、「鳥獸言語」という題の対策が出された。その問題文と答案文が『本朝文粹』巻三に収められている。

本稿ではこの対策「鳥獸言語」について見ていこうと思うが、これは、右に述べた『続日本紀』の記事や『古事記』『日本書紀』『風土記』など八世紀のテキストに見られる(聞きなし⁵⁾)の記事と比べると、同じく言語の境界領域上のことでは

あつても、方向性の違いがある。(聞きなし)の場合、自然界の音や形を人間の言語音や文字に置き換えて解釈するのに対して、対策「鳥獸言語」の場合、人間の言語とは別にある言語体系として鳥獸の「言語」を解そうとする。見知らぬ音や形を人間言語に引き寄せるのではなく、見知らぬ言語体系である「鳥獸言語」のほうへ出て行くのである。

では、鳥獸には鳥獸の言語があると言うとき、その「言語」とはどのようなものとして捉えられているか。また、人間の言語の外にある「鳥獸言語」について論じるといふのは、九世紀から十世紀初めにかけての時期においてどのような意味を持ち、同時代の他の言説とどのような関係にあったか。そして、「鳥獸言語」について論じることを通して、どのような世界像を抱えることになったか。こころしたことを考えてみようと思ふ。

2 対策「鳥獸言語」の問題文

対策とは、大学寮の学生のトップである文章得業生が史官になるための試験であり、時の文章博士がそれに準じる者が出題する。つまり当代の国史を編纂する者が、次代の国史を編纂することになる者に向けて出題するわけである。実際、対策「鳥獸言語」の出題者である三統理平は、六国史最後の国史『日本三代実録』の編纂に携わり、解答者である菅原淳茂も後に文章博士になった。

対策文は、「問ふ……」で始まる出題者の問題文と「対ふ……」で始まる解答者の答案文からなり、出題者が問いかけ、促し、

考えていく道筋をいくつか具体的に提示して導き、解答者はそれに応じて答えを組み立てるといふ、問答形式である。鳥獸の鳴き声を言語として聞くといふときの「言語」の捉え方も、問い掛けとそれへの答えといふ関係性のなかで作られていく。それではまず、問いから見ていこう。

問ふ。浮陽は上に潤ひ、四蹄を運らして以て功を翼く。凝陰は下に沈み、五龍を錯へて以て陶化す。故に虚を排し実を黜むは、二気を殊途に稟く。識を抱き靈を含むは、万類と雖ども同致なり。是れ以て秦氏の祖は百鳥の音を知り、介国の人は六畜の語を覚る。

右に挙げた問題文の冒頭部は、「鳥獸言語」に関するいわば命題である。引用本文中の「秦氏の祖は百鳥の音を知り」とは、秦王朝の祖の伯益といふ人が鳥の言語に通じていたことを指すが、その話は『書経』堯典や『史記』秦本紀に載る。また「介国の人は六畜の語を覚る」とは、『春秋左氏伝』僖公二十九年、介国の葛盧といふ人が牛の鳴き声を聞いて、言語として理解し、その牛の話したことを人々に伝えたといふ記事を指す。こうして、「鳥獸言語」に関する最も古く正当なテキストに載る典拠を二つ挙げ、人間が鳥獸の鳴き声を聞いてそれを言語として理解するといふ「鳥獸言語」現象は、果たして真実なのか偽りなのかを問うのが、この問いの趣旨である。

要旨としてはそれに尽きるのだが、それを言うために陰陽の気による万物生成から説き起こす。「浮陽は上に潤ひ……凝陰

は下に沈み……』という語り出しのところは、『日本書紀』神代の冒頭の天地開闢と同じく『淮南子』を典故として、軽い陽の気は上にあがり重い陰の気は下に沈み、四時・五行が循環するようになって万物が生まれた、と述べ始める。そして、鳥獸たちはそれぞれ異なる気を稟けて生まれるので様々な種類に分かれているが（「二氣を殊途に稟く」）、しかし「靈識」（「抱識含靈」）という知覚する心の働きをもっているという点では、人も鳥獸たちもみな同じであり（「万類と雖ども同致なり」）、だからこそ秦王朝の伯益や介国の葛盧のように鳥獸の言語を理解できる人間もなかにはいるのだ、と述べ進める。春夏秋冬の四時の巡環を馬の疾駆に喩えて「四騶」と書き、五行の巡環を龍の飛翔に喩えて「五龍」と書くなど、鳥獸にまつわる修辭を駆使して、「鳥獸言語」現象が起こりうる世界の理^{ことわり}を提示している。

ここで重要なのは、鳥獸の鳴き声を「語音」と呼んでいることである。「百鳥の音を知る」とは、鳥の鳴き声をただの「音」として聞くのではない。この句は「六畜の語を覚る」と対句であり、一つの熟語「語音」を「音」と「語」に分割しているのであって、意味としては、百鳥の「語音」を「知覚」し、六畜の「語音」を「知覚」するということになる。「語音」とは言語音である。古代中国には鳥獸の鳴き声を言語の音として知覚できる人がいたということである。これからこの対策文の検討を通し、鳥獸の鳴き声がどのようなチームによって、どのようなものとして捉えられているかという点に、特に注目していきたい。

さて、「鳥獸言語」の真偽を問うのがこの対策の趣旨であるが、右に引用した本文につづけて、それを考えるための糸口を、問いは三点提示する。まず一つの糸口について。

然らば則ち、子長芝の村司に對^{たい}ふるに、疑なるが如く信なるが如し。鬻叔夜の葛公に論ずるに、是と為すか非と為すか。

ここでは「鳥獸言語」についての真偽を実証・論証した事例が二つ挙げられる。一人目の「子長芝」とは、孔子の弟子公冶長のことである。皇侃『論語義疏』によると、公冶長は「鳥語を解す」能力があり、そのことを村司に信じさせるために、遠く離れた場所ので起きた出来事を鳥から聞き、実際にその場所の人を遣わして確認させたという。

二人目の「鬻叔夜」とは、竹林七賢人の一人で「養生論」その他多くの作品が『文選』に収められ有名であるが、本文で「鬻叔夜の葛公に論ずるに」というのは、『声無哀楽論』を指しているのではないかと思われる。『声無哀楽論』とは、『礼記』樂記以来の音楽論で説かれるところの、声に哀楽の心があってそれが他人に伝わるという考えに対して、反論を試みたものである。この中に、先にふれた、牛鳴を解した介国の葛盧の話（『春秋左氏伝』）を論じた箇所がある。葛盧が牛の鳴き声を聞いて牛の気持ちがあつたのは、牛の鳴き声に哀心があつたらか、それとも牛の鳴き声を言語として解して知つたのか、どちらだろうかと問題提起する。そして、「此れ、心たるや人と

同じく、獸形において異なるのは、此れまた吾の疑ふ所なり。」（人と獸である牛とは形が異なるわけで、それなのに心が同じということはない）と言ひ、声を聞いて牛の心が直接に人である葛處に通じたという説を否定する。「此れ、其の語を称と爲して其の事を論ずるは、猶ほ異言を訳伝するがごとし。」と言ひ、牛の鳴き声を「言語」「語」「言」として葛處は聞いて、その内容を人々に伝えたのであつて、異なる「言語」の間に立つ通訳のようなものだ結論する。

これは、『春秋左氏伝』僖公二十九年の記事「介の葛處、牛の鳴くを聞いて曰く、是れ三犧生み、皆之を用ひたり。其の音に云ふ、と。之を問へば信なり。」において、「其の音」というのが、声という器に盛られた心を知るといふ音楽論の「(声)音」のことなのか、それとも言語音のことなのか、ということ論を論じる問題系に位置付けられる。杜預の注もこの記事について、「人に聴きたることを伝言す。或ひは鳥獸の情に通ず。」と述べ、言語として解して人々にそれを「伝言」したのか、それとも声を聞いて「情に通じた」のかと、二つの可能性を並立して出す。

「嵇叔夜の葛公に論ずるに、是と爲すか非と爲すか。」という質問は、「鳥獸言語」の是非を論じるにあつて、こうした議論をふまえ、鳥獸の鳴き声を聞いてわかるのは心なのか言語なのかを明らかにするように示唆しているのだろう。このことは、以下の二つめの糸口にも関わる。

十二律の外、何れの変を吹きて以て通言の術を伝ふ。六十

四画の中、奚れの文を用ひて以て解語の明を得。

ここでは、鳥獸の鳴き声や鳥獸のもたらす文様を言語として解するための方法について述べる。「十二律」とは、中国音楽の十二音階のことであり、「六十四画」とは、易占の六十四卦のことである。「十二律の外」と「六十四画の中」とは対句で、「中外」といふ熟語を分解しているので、意味としては、十二律の中も外も、六十四画の中も外も、となる。文意は、十二に定めた音階の内側も外側も全部ひっくりかえして、どのようなメロディーを笛で吹くと、鳥獸と「通言」できるのだろうか、というもの。何故このようなことを言うかという点、『漢書』律曆志によれば、鳳凰という鳥の鳴き声を写したのが十二律だという起源説があるからである。人間の音楽の音階は、もとを辿れば鳥獸の声なのだから、律管(笛)でメロディーを吹けば鳥獸に通じるはずだということである。また易の卦も、『易経』によれば、古代の聖人が亀甲や龍の体の文様(鳥獸の文)を見て発明したものであり、やはり鳥獸の「文」が起源とされる。もとを辿れば鳥獸の「文」なのだから、六十四卦のどれかを媒介にして鳥獸の「語を解す」ことができるはずだという。

興味深いのは、十二律・六十四卦の「中外」なので、律や卦として定められたシステムの内側だけでなく、外側まで可能性として示唆していることである。太古の世に聖人が鳳凰の声を聞いて十二律を定め、亀甲や龍の文様を見て六十四卦を発明したように、人間の言語システムの根源には「鳥獸言語」があるわけだが、接点である十二律・六十四卦は全体から見れば

一部であり、その外側には膨大な「鳥獸言語」の領域が広がっている。だから現時点でもう一度新たに鳥獸と交感して、十二律・六十四卦の枠を押し広げようということなのだろう。

ところで、律管で吹く音楽のメロディーを、言語を通わせる技術（「通言の術」「解語の明」として捉えているが、それは、鳥獸の鳴き声を音階に分節して、「言語」として解すということである。鳥獸の鳴き声を「言語」として解すとき、音楽の音階に当てはめて理解する例は、『三国志』魏書・方技列伝に収められた管輅別伝に見られる。管輅は鳥の鳴き声を聞いて、遠く離れた場所で起きた事件や未来に起こるであろう出来事を知る能力を持っていて（「鳥鳴の候」）、その方法を人に教えるとき、「音律」「八風の変」「五音の教」「律呂を以て衆鳥の商と為す」などと、音楽の律の用語を使って説明している。それは、鳥獸の鳴き声は鳥獸にとっては「言語」なのだから、そこには何らかのシステムや分節化があるはずだという考え方に裏打ちされているのだろう。

こうして問いで、「鳥獸言語」の真偽を考えるための糸口を、古代中国の典籍を典拠とするものから二点掲げたが、三點目には、インドの仏教において「鳥獸言語」がいかに考えられるかと、視点を転じる。

しかのみならず紺頂世に出て、道の教え冲融たり。金口機に随ひ、演説微妙なり。

釈迦（「紺頂」「金口」）は相手の「機」（悟るための素質）に応

じて法を説く。釈迦が法を説く対象は、諸菩薩や諸天や龍や人間や鳥獸や草木などありとあらゆるものであり、それらはみなそれぞれに言語を異にするものたちを一同に集めて、どうやって説法するのか、というのが「金口機に随ひ、演説微妙なり。」の背景にはある。仏教における言語の問題をここでは問うている。「鳥獸言語」の真偽について考えるとき、古代中国の経典だけでなくインドの仏教の言語観からも考えてみるように示唆しているのである。

以上の三點の糸口を提示したうえで、問いは次のように文章を結ぶ。

子が博古を遅ちて、惑を今に拓かん。

あなた（解答者）の古についての該博な知識によって、「鳥獸言語」が果たして真実なのか偽りなのかという問題を解決したい。では、こうした問いの問題提起と考えるための糸口を受けて、答案はどのように応答しているだろうか。次章で見えてみよう。

3 対策「鳥獸言語」の答案文

対ふ。竊におもひみれば、陰陽の精邁ひて、万象の形を差にする所以なり。清濁の気分かれて、五虫の其れに由り性を殊にす。是の故に、枢機の発を慎む者は人民と為し、榮辱の主に味き者は称して禽獸と曰ふ。飛羽奔足は吾が党と辞を同じくする所に非ず。雖実排虚は豈に爾が輩と

共に議すべけんや。然るに礼経に文を載せて、夷隸と貉隸と職を分かち、聖人教えを垂るるに鳥言と獸言と司を存す。

語り出しは問題文と同じく、陰陽の気の稟け方の違いによって様々な種類の生き物に分かれることから説き起す。そして、人間と鳥獸とが類を異にし、両者の間には明確な区別がある（枢機の発を慎む者は人民と為し、榮辱の主に味き者は称して禽獸と曰ふ。）と述べるところまでは、問いの論旨と同じである。しかし問題文が、万類に分かれていても「靈識」をもつという点で人間も鳥獸も同じであり、だから鳥獸の「語音」を解する人がいるのだと論を展開するのに対して、答案では、人間と鳥獸とは性質が異なるのだから「辞」（ことば）を同じくすることはなく（飛羽奔足は吾が党と辞を同じくする所に非ず）、そのため互いに言語を通わすことはありえないはずだ（蹠実排虚は豈に爾が輩と共に議すべけんや）、それなのに礼経には「鳥言」「獸言」を管掌する「夷隸」・「貉隸」という役所のこと載っている、と論じる。

「礼経に文を載せて」とは、「周礼」秋官の「夷隸は牧人を役して牛馬を養ひ、鳥言に与るを掌る。」と「貉隸は服不氏を役して獸を養ひ教授するを掌り、獸言に与るを掌る。」を指す。經典に「鳥言」「獸言」に携わる役職が載るということは、古の聖代では聖人が鳥獸に教えを垂れるときには「鳥言」「獸言」すなわち「鳥獸言語」で話したということの意味する。人間と鳥獸が互いに言語を通わすことは陰陽の原理から言っておりえ

ないことであっても、理想の範である古の聖人が行ったことであるから、真か偽かということでは、「真」なのだ。「鳥獸言語」に対して、原理上ありえないことなのに古の聖代ではありえたという不思議な現象として捉えているのが、問いとは異なる答案の立場である。

次に、問いが提示した第一点目の糸口である、鳥語を解した公治長の話と牛鳴を解した葛盧の話について、答案ではこのように述べる。

其の迹を尋れば、則ち葛盧の魯侯に朝し、犠牲を牛向に辨ふ。其の流を挹めば、則ち公治の衛國より反り、纆繼を鳥声に受く。

「其の迹を尋れば……」其の流を挹めば……」と言って、「鳥言」「獸言」を話せた古の聖人の流れをくむ者として、葛盧と公治長を位置づけ、さらに古の聖人が解したのが「鳥言」「獸言」であるのに対し、後世の葛盧と公治長が解したのは「牛向」「鳥声」だとして、古の聖人と後世の葛盧・公治長との間にリンク差を設ける。同じく「鳥獸言語」を解すにしても、古の聖人には「言」と書き、後世の葛盧と公治長には「向」「声」という鳴き声の意味する語で書く。

次に、問いが提示した第二点目の糸口である、「鳥獸言語」を解するための技術について、答案は以下のように述べる。

陽律陰律、鳳管の変通する所、奚れの言か候はざらん。卦

辞文辞、機文の推策するところ、何れの語か明かにすると靡なまからん。

この箇所には「変通」「候ふ」「推策」という、『易経』の卜占用語が頻出する。「鳥獸言語」の解説が、卜占の技の側から捉えられている。

「鳳管」とは、十二律についての起源神話に基づく語である。音階十二律は、鳳凰という鳥の鳴き声によって定められたという起源神話があり、その十二律に整えられた笛のことを、ここでは「鳳管」とよぶ。文意は、鳳管を吹いて十二律（「陽律」と「陰律」を合わせて十二律。）に通うメロディーを奏でることとで、鳥獸のどんな「言」「語」でも「候」（推し量る）せないということはない、と言う。また「機文」とは、易の卦の起源神話に基づく語である。易の卦は、古代中国の聖帝伏羲が鳥獸の体毛の文様を見て発明したという起源神話があり、その卦爻によって「推策」すれば、鳥獸のどんな「言」「語」も解明できないことはない、と言う。

音楽と卜占のつながりとしては、実際、笛を吹いて相手の心を知る占いが、『史記』律書に載る。それには、「律を吹き声を聴き、孟春を推して以て季冬に至り、殺氣相並ぶ。」とある。相手の心を知るためには、相手がどんな声でどんな歌をうたっているかがわかればよい。遠く離れた場所において声を直接聞くことができなくても、律管を吹けば、声の気に応じて律の気が反応するので、相手の声の調子を知ることができる。律管を吹いて相手の声から心を占い出すというのは、古代中国の気の論

や、歌声には心が盛られるという音楽論に通じる。

律管を吹いて「候ふ」のは、心が盛られた歌の声なのだが、答案ではそれを「言語」（奚れの言か候はざらん）「何れの語か明かにすること靡なまからん」として捉えている。十二律に分節された鳥獸の鳴き声から、心を占えない出すのではなく、「言語」を占えない出すという。音楽の十二律や易の六十四卦によって鳥獸の「言語」を占い出すことができるのは、十二律や六十四卦というシステムの起源が、鳥獸の鳴き声や文様にあるからである。「鳥獸言語」は人間の言語にとつて、外部であると同時に根源でもあるということだ。だから人間が「鳥獸言語」を理解するのは、全く不可能というわけではないが、しかし知れない領域も広がっている。

こうした理解可能な範囲の外延部にある異質な「言語」への探究は、九世紀から十世紀初頭という時期にあって、他の同時代言説とどのようなつながりをもっていただろうか。次章では、この対策が出題された延喜八年から遡ること、わずか三年、延喜五年に奏上された『古今和歌集』の両序で展開される「歌」「和歌」の歴史叙述において、こうした異質なものがいかに捉えられているか、見てみよう。

4 神世の歌

史官の試験として出された対策文「鳥獸言語」と、『古今和歌集』を天皇に奏上するにあたって書かれた序文との間には、あるつながりが見い出せる。対策「鳥獸言語」の出題者である三統理平と、真名序を書いた紀淑望とは、共に延喜六年の日本

紀講に出席しており、竟宴和歌が残っている。二人は日本紀講の知を共有する史官であった。⁷⁾

『古今集』両序が、中国の詩集の序や詩論の序をふまえて和歌集の序を書くとき、詩序が三皇五帝という中国の太古の聖帝の代からの詩の歴史を叙述するのに対応させて、日本の神代からの歌の歴史を叙述する。特に、今の詩と太古の聖帝の代の詩との違いについて述べるのに対応させて、神代の歌と人の世の歌との違いについて、歌の三十一文字というところから述べる。人の世の和歌とは異質な神代の歌とはどういうものだったかについて述べるのは、人間の言語とは異質な「鳥獸言語」について対策が論じるのに通じる。

ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず、素直にして、事の心わきがたかりけらし。人の世となりて、素戔鳴尊よりぞ三十文字あまり一文字は詠みける。

これは仮名序の一節である。歌の形が五七五七七という音数律の三十一文字に定まったのは人の世になってからで、神代にも歌はあったが（この歌、天地開け始まりける時よりいできにけり。）、⁸⁾「三十文字あまり一文字」という「歌の文字」には定まっていなかった。そのため神代の歌は「事の心わきがたかりけらし」なのだと言う。では、「事の心わきがたかりけらし」とはどういうことを指しているのか。「事の心」とは何か。何から何を「わく」のか。

渡辺秀夫氏によると、『古今和歌集』両序で述べられる和歌

論の「和歌」「歌」は、『毛詩』大序の詩論における「詩」をそのまま「歌」に代えたわけではなく、詩と歌声と楽を一体で捉える古代中国の音楽論における「歌（声）」のことなのだと言く。音楽論において、詩と歌（声）とは別々の行為としてあるわけではない。『毛詩正義』をふまえると、「詩」とは必ず「歌われる」もの——「詩」が天地・鬼神を感動させるわけは、それが「歌詠され」てこそ始めて、その（楽）の「靈能が発揮されるものだ」という。「詩」が「天地・鬼神」を感動させるのは、「声（歌詠）」や「楽」の音律に乗せるがゆえの効用によることを述べている。⁹⁾

また『毛詩正義』には「詩は是れ楽の心、楽は詩の声と為す。」とあり、『文心彫龍』楽府には「和楽の精妙なる、固より表裏して相資く。故に詩は楽の心為り、声は楽の体為ることを知る。」とあって、詩と歌声は表裏一体の関係で、詩は楽の「心」、歌声は楽の「体」だという。つまり、詩は「心」として裏にあり、歌声は「体」として表にあらわれたところにあり、詩と歌声と楽とは三位一体で機能しているのである。

『古今集』仮名序の言う「事の心わきがたかりけらし」の「事の心わく」とは、「心」である詩と「体」である歌声・楽という対の関係をふまえると、「心」と「体」が一致している状態から「心」を分けて取り出すことを指していると考えられる。そして、「心」である詩が「体」である歌声・楽から分けて取り出されたものが、辞ことばなのだ。歌声・楽から分けられた辞ことばとは、仮名序の言い方では「三十文字あまり一文字」の「歌の文字」である。情が濃い神代にあっては、歌声の裏にある

「心」は互いに察することができたが、人の世になると、五七七の音律で、合わせて三十一文字に分節された「歌の文字」の辞によって、はじめて「心」がわかる。歌の三十一文字とは、対策「鳥獸言語」が、鳥獸の鳴き声を「言語」として解する術として、十二律・六十四卦という分節を考えているのと同じである。

一方、真名序では以下のように述べる。

然るに神世七代、時質にして人淳く、情欲分るる無く、和歌いまだ作らず。素戔鳴尊の出雲の国に到るに速はやびて、始めて三十一字の詠有り。今の反歌の作なり。其の後、天神の孫、海童の女といへども、和歌を以ちて情を通はさずといふこと莫し。

仮名序が、神代の歌は三十一文字に分節されていなかったの「事の心」を分けて知ることが難しかったと述べるのに対して、真名序は「情欲分るる無く、和歌いまだ作らず」と述べる。人の世になって、「情欲」（物に感ずる心）が分かれ、「三十一字の詠」ができ、「天神の孫」と「海童の女」という異種の間でも和歌を以て情を通わずことができるようになった。ここでは、心と物、心と心が一度分かれ、その後で分かれたものどうしをつなぐのが和歌だと捉えられている。

このように仮名序と真名序の間では、何が「分く」なのかをめぐる相違があるが、そうした差異をもちつつも、「古今和歌集」の仮名序と真名序、そして対策「鳥獸言語」の問いと答案

は、現在の自分たちの「和歌」や「言語」の外延部に神世の「歌」や鳥獸の「言語」があると定位し、それがどういうものなのかについて述べており、その点でこれら同時代言説は通じている。

それにしても何故これらは、現在の自分たちの「和歌」や「言語」とは異なる神世の「歌」や「鳥獸言語」というものを想定し、それがどういうものなのかについて思い巡らせるのだろうか。こうした異質なもののへの探究を促すのは、どういう知の営みなのだろうか。それを解く鍵が、問題文の末尾の一文「子の博古を遅ちて惑を今に拓かん。」にあると思われる。「博古」とは古に関する該博な知識の収集である。次章ではこうした問題について考えてみる。

5 多聞博覧の士

問題文の末尾で出題者は解答者に対して、「鳥獸言語」に関する「博古」の知識を述べるよう求めているのだが、この「博古」とは、試問というものの本質をなす。この対策は秀才に課した方略策である。『令集解』考課令・秀才條に引用された古記によると、「方略とは、無端の大事なり。多聞博覧の士、無端を知る。故に試すに無端の大事を以てするなり。」とあって、果てが無いほど（無端）の「多聞博覧」な知識が試される。

実際、対策「鳥獸言語」の答案は、「多聞博覧」ぶりを大いに發揮し、「鳥獸言語」に関するあらゆるパターンを対句仕立てで列挙する。第三章に挙げた引用本文の後、以下のような展

開がつづく。

牛鳴を解した介国の葛盧と鳥語を解した公治長とをセットにして、「夷狄の人、土俗に習ひて芸を成す。」とまとめ、李南と侯瑾という方術士（ともに『後漢書』方術列伝に載る。）が馬語と鳥語を解した話をセットにして、「法術の士、天機を稟けて方多し。」とまとめる。「芸」「方」とは、「鳥獸言語」を解するための技を指す。

また、人語を話せる獣である猩猩と狒狒、人語を話せる鳥である鸚鵡と鸚鵡をセットにして、次のようにコメントする。

素性の資とするところ、類を同じくして種を異にす。玄理の往くところ、言断ちて道窮まる。

鳥獸なのに生まれながらに人語を話せるという性質をもつ生き物がいるということに関して、人語を話せない他の普通の鳥獸たちと、それらの特別な性質をもつ生き物とは、「類」は同じだが「種」が異なるとし、そうしたことはあまりにも奥深い道理なので、言葉で説明できるようなものではない（玄理の往くところ、言断ちて道窮まる」と、述べる。このように常識を超えた奇異な事物の性質について述べるのは、『山海経』に代表される博物や異物志というジャンルの知に属する。

『山海経』に注をつけた晋の郭璞はその序「注山海経序」で、「天下の至通に非ずんば、与に『山海』の義を言ひ難し。嗚呼、達観博物の客、其れ之に鑑よや。」と、「博物の客」に向けて呼びかける。『山海経』の内容には、地理書としての性格、奇異

な動物・植物・物産を記す異物志としての性格、祭祀の書としての性格、卜占の書としての性格といった側面があるが、特に二番目の異物志としての性格と四番目の卜占の書としての性格は通じていて、奇異な動物の鳴き声や行動が未来を知らせる。

怪異な物事を博く知ることや未来を知るといった右の諸性格を網羅する書物として、この他にも博物志・六朝志怪小説・讖緯書の諸書があり、それらはその成立にあたって互いに交渉をもつとされる。博物志は辺境や異国の地にあるとされる珍奇な物について書かれたもの、志怪小説は妖怪や幽霊など怪奇現象の話が収められたもの、讖緯書は未来予言の書であり、三つのジャンルはともに空間的、時間的、質的、あらゆる意味で「端の無い」ほど博く知るものである。方略策で「無端を知る」ことが求められるのも、端が無いほど博く知るといのが、現在の諸相を見極めて未来を知ることに通じるからであり、史書編纂にとって重要だったのだろう。

さて、対策の答案では右の引用本文に続けて、やはり同じく「無端」の一角をなす『搜神記』『搜神後記』という六朝志怪小説から、それぞれ二話づつ取り上げる。一組目の一つは、『搜神後記』の、丁令威という神仙になった人の話。死んで鶴に化して故郷に帰り、鳥として空を飛び回りながら、村人たちに神仙修行をするよう人間の言語で語りかけた。一組目の二つは、『搜神記』の、左元放（左慈）という方術士の話。命を狙う者の追跡から逃れるため、羊に変身して群れのなかに紛れ込み、追っ手に向かって羊の身体のまま人間の言語で嘲りの言葉を投げ掛けた。この二つの話は、人間が鳥獸に変身して、鳥獸の身

体で人語をしゃべった話として選ばれ、セツトにされる。「鳥獸言語」の典拠として、鳥獸が人語をしゃべる話だけでなく、人間が鳥獸に化した話まで並べる。

二組目の一つは、『搜神後記』の、願旃という人が狩りの途中で、人間の言葉をしゃべる狐に会った話。年をへた狐は、人語を話したり人間に化けることができる。二組目の二つは、『搜神記』の、張聘という人の乗った牛が、突然に人間の言葉をしゃべって未来を予言した話。この二つの話は、鳥獸が人間の言語をしゃべった話としてセツトにされる。そして、これら二組、計四話について次のようにコメントする。

皆これ形神寂寞なり、一方に以て推すべからず。視聽希夷なり、一孔に以て定むべからず。

「形神寂寞」とは、身体などの形あるものも、魂魄など形なきものも、すべて無だという、道家思想でよく使われる言葉である。これまで挙げてきたような、体と魂が人間と鳥獸の境を通いあう事例について、これらは奥深い道理なのだから、それがどんなに不可思議で、通常視たり聴いたりできないことであっても（視聽希夷）、狭い視点（一方・一孔）から推し量って判断するべきではない、と述べる。常識の狭い孔を通して見ると不思議なことなど何もなく、もっと広い道理に立てば、この世に不思議なことなど何もなく、みな起こるべくして起きている。「無端」にわたる故事を収集し配列するのもそのためである。

実際、『搜神記』を書いた千宝は陰陽術数や易占に詳しく、そして史書『晋紀』を書いた史官である。中国六朝時代には志怪小説を書くことは「史官の末事」（『隋書』経籍志）、つまり史官が史書編纂の一環として行うこととされていた。だから九世紀から十世紀初めの日本の史官にとっても、志怪小説は単なるお話ではなく、多層にある現実を構成するものであり、博く知るうえで欠かせないものだった。

このような「多聞博覧」の知が史官に求められたのは、对策だけでなく、国史の編纂やそれと関わる日本紀講においてもそうだった。弘仁十年（八一九年）の奥書をもつ、日本紀講出席者によるノート『弘仁私記』の序文で、『日本書紀』は次のようなものとして捉えられていた。

それ日本書紀は……異端小説、佐力乱神、多聞を備と為し、該博せざるなきなり。

九世紀の史官にとって『日本書紀』という史書は、本文一つだけでなく「一書に曰く」「或説に曰く」など他の書物の説も合わせて載せたり（異端）、「反語」「諺」まで載せ（小説）、内容面でも「佐力乱神」まで含めた「多聞」「該博」の書だった。さらに私記は、『日本書紀』の記事のうちどれが「佐・力・乱・神」のそれぞれに該当するか、自注のなかで挙げていく。「佐」については、次のように示す。

大鷦鷯天皇御宇の時、白鳥陵の人、化して白鹿と為る。

又、蝦夷叛きて上毛野田道の墓を掘る。則ち大地、目を瞋らし墓より出で、以て蝦夷を咋ふ。

これは、仁徳紀六十年十月と同五十五年の記事の要約である。この二つの記事は、いずれも人間が鹿や蛇という獣に化した話である。一つめの記事では、この出来事を目の当たりにした天皇が、「今この怪を視るに、甚だ懼し。」と受けとめ、二つめの記事でも、この出来事について、「時人の云はく、『田道、既に亡にたりと雖も、遂に鱗を報ゆ。何ぞ死にたる人の知無からむや』といふ。」というコメントを載せる。人間が獣に変身するという現象が、未来のことや幽冥界について知ることと結びついている。

九世紀の史官の言説である『弘仁私記』序は、『日本書紀』のこれらの記事を、「恠力乱神」の「恠」として捉え直しているのだが、これは、対策の答案が典拠として取り上げる『捜神記』の本質に通じる。『捜神記』には「弘仁私記」の「恠」と同様な、人や鳥獣が化して他の生き物に変わる話が多く集められている。特に卷十二の冒頭では、五行の気の循環によって万物の性質が変化し、別の生き物に変身する理が論じられ、各話のなかで、『淮南万畢』や『白沢凶』など博物や陰陽術数の書物が書名明記で引用される。あらゆる物の性質を熟知し、物の形や性質が変化することに通達する「博物」「多聞博覧」の知は、「以て神道の誣ひざるを發明するに足れり。」(『捜神記』序)の「神道」、すなわち幽冥界や未来のことを知ることであった。

九世紀の対策には、「神仙」「群忌を決せよ」「異物を弁ぜよ」「死生を分別せよ」(『都氏文集』卷五所収)など怪異やその周辺の事柄について問うものがいくつもあり、それは同時期に書かれた史書『続日本後紀』『文徳天皇実録』に怪異記事が多いことと対応する。九世紀の史官は、儒教の素養を武器にして怪異現象の最前線に身をおいていたといわれる。対策「鳥獸言語」もまた、人間の言語とは異なる鳥獣の「言語」とはどういうものであり、鳥獣と「言語」を通わせるとはどういうことかについて考えることを通して、認識できる領域の外延部にある怪異へと接近しようとしていた。

自分たちの属する言語体系とは別の言語体系について論じることを通して、外延部へ出て行こうとする探究は、対策の問いの提起した第三点目、仏教の言語観から「鳥獸言語」はどう捉えられるかという問題とも大いに関わる。これについて答案は次のように答える。

一音にして能く説く。仏語に二三無しと雖ども、諸機の詮ずる所、法蔵既に八万有り。

ここでは仏教の「一音説法」という思想をふまえている。仏の発する言語は根源的なもので、一つの音に無限の真理が含まれている。それを人間の「機」に合うように人間の言語に翻訳するとなると、八万ともいわれる無量の經典の文字を費やしても、それでも完全に言い表すことはできない。

このように、「言語」のあり方を通して超越の領域を思考し

ようとする仏教の言語観をふまえ、それと同時に古代中国の音楽論や律や易の言語観、さらに博物や陰陽術数までを自在に配列して、人間の言語の根源であると同時に外部でもある「鳥獸言語」について問答している。人間の言語ならぬ「鳥獸言語」について思考することは、人間以外のけものたちの目には世界がどのように分節されて見えているのかを知ることでもある。歴史書を書く史官の知には、このような世界の多様性を知るといふ側面があった。

【注記】

- (1) 「文字の起源をめぐる言説」(二〇〇三年一月古代文学会セミナー研究会のレジュメ)
- (2) 「文字以前の文字へ」『言葉の重力―短歌の言葉論―』(洋々社、一九九九年)
- (3) 「技としての書くこと」『古代文学』四十二号(二〇〇三年三月)
- (4) 津田氏はそれを「文字の暴走」と呼び、「漢字文と『言語』」(二〇〇二年八月古代文学会夏季セミナー発表、猪股氏は言葉をいったん解体してから改めて立ち上げる「言語遊戯」と呼ぶ)『万葉歌の漢字遊戯』『武蔵野文学』五十号(二〇〇二年十一月)。
- (5) 清水章雄氏『草木言語』論「オノマトペの発生」『神の言葉・人の言葉―へあわい』の言葉の生態学(武蔵野書院、平成十三年)は、「聞きなし」という音をめぐるといふ。言語と非言語の境界の問題を、文字の問題と絡めて論じている。
- (6) 『本朝文粹』卷三所収の対策「神仙」「漏刻」の出題者・春澄善繩は『続日本後紀』を、解答者・都良香は『文徳天皇実録』を編纂している。
- (7) 古代文学会セミナー通信二〇〇三年二月号での津田博幸氏の教示による。
- (8) 「歌のちから」天地・鬼神を動かすもの―「礼楽」と「歌」―『国語と国文学』二〇〇二年五月
- (9) 全釈漢文大系「山海経・列仙伝」(集英社、昭和五十年)前野直彬解説
- (10) 夏述貴著／小川隆訳「讖緯の学と漢晋の志怪小説」『緯学研究論叢』(平川出版社、一九九三年)
- (11) 大曾根章介「学者と伝承巷説―都良香を中心にして―」『日本漢文学論集第二巻』(汲古書院、平成十年)
- (12) 小坂眞二「古代・中世の占い」『陰陽道叢書』4特論(名著出版、一九九三年)